〈経営研究　第17巻　第2・3合併号　平成16年3月〉

翻訳の難しさについて

—インディアン関係資料翻訳の場合—

伊　藤　　聰

序

これまで，翻訳の難しさについていろいろな面が語られてきた。例えば最近では，藤岡啓介は翻訳者の条件として６点を掲げているが，その中に，「自分が得意とする外国語を母語とする土地で実際に生活したり，何度もその地を旅行した経験のあること。その地の文明・文化に対して知識と理解があること」が挙げられている[1]。これはごく当然のことである。そのために翻訳者は「何度もその地を旅行した経験」がなくとも，原著者に問い合わせるか，辞書類を身辺に備えたりすることによって万全を期そうとする。それでも，この世に誤訳あるいは不充分な訳ともいえるものが後を絶たない。そのような時，私たちは翻訳の難しさを再認識するのである。

本稿では，筆者が目にしたインディアン関係資料の誤訳ないし不充分だと判断される訳を取り上げながら，翻訳の難かしさについて筆者なりの考えを述べてみたい。

Ⅰ

最初に取り上げる訳は，１９９１年に某放送局から放映された番組の中に見られたものである。この日本語版の元はＢＢＣ（イギリス）制作の “Savagery and American

Indian”(Part I - “Wilderness”, Part II - “Civilization”)である。日本語版の第１部のタイトルは「未開の地」，第２部は「文明の名のもとに」とされている。後者が当初，「野蛮な住民」とされていたものが，放映当日にこのよう改変されていたのは何か象徴的な出来事である。

誤訳と思われたのは，第１部の中程に引用されているSpeckled Snakeの次のような文の中“Great Father”である。この文は，１８２９年，当時の大統領アンドリュー・ジャクソンが「文明五部族」と称されていたクリーク，チカソー，チェロキー，チョクトー，セミノールの５部族をミシシッピ河以西へ強制移住させようとした折に，当時１００才を越えていたといわれるクリーク族のSpeckled Snakeが，皮肉まじりに述べたものである。

“Brothers, I have listened to many talks from our great father. When he first came over the wide waters, he was but a little man...very little. His legs were cramped by sitting long in his big boat, and he begged for a little land to light his fire on

....But when the white man had warmed himself before the Indians' fire and filled himself with their hominy, he became very large. With a step he bestrode the mountains, and his feet covered the plains and the valleys. His hand grasped the eastern and the western sea, and his head rested on the moon. Then he became our Great Father. He loved his red children, and he said, “Get a little further, lest I tread on thee....”

Brothers, I have listened to a great many talks from our great father. But they always began and ended in this - “Get a little further; you are too near me.”

この中で使用されている表現“Great Father”が，番組では「祖先」と訳されていた。明らかに誤りで，正しくは「アメリカ合衆国大統領」の意味である。手元にある複数の英和辞典のうち，この語句を載せているものはない。

Webster's Third New International Dictionary(1981,以下 *Webster*)には“great father”が収録されており，同義語としてGreat White Fatherが掲げられている。その“Great White Father”の項には次のような意味が記載されている。

1. the president of the U.S.
2. a person in a position of authority

先の英和辞典のうち，研究社と小学館の辞書は“Great White Father” を載せている。さらに，*A Dictionary of Americanisms on Historical Principles* (ed. by Mitford M. Mathews, Meicho Fukyu Kai, 1985)には，その語源まで説明されている。

本文ではもともと“Great (White) Father”が「アメリカ合衆国大統領」の意味で使用されていたが，全体を一読すると，２行目以降で代名詞he, His が使用され，４行目ではずばり“the white man”という語句があるので，話者が一般の白人を指しているとも受け止められる。そして，８行目では，“Then he became our Great Father.”となっており，この時点で*Webster* にある“the president of the U.S.”，ないし“a person in a position of authority”の転義とも理解できる。いずれにしても，訳者が“ Great Father”を「祖先」としたのは“great-grandfather”からの類推かもしれないが，“he”や“his”という代名詞や“the white man”という言葉から考えてみて誤りであることがわかる。

II

次に紹介する誤訳は，複数のインディアン関係の翻訳書がある著者の１冊からである。この訳書の中には複数の誤訳と，原文の内容を伝えるには明らかに不充分だと思われるものが見られる。

最初の誤訳は，カリフォルニアのウイントゥ族の女性聖職者が白人の自然に対する無神経な行為（現在でいう自然破壊か）を，自分達のやり方と比較しながら批判した文中のものである。原文は“When we burn grass for grasshoppers, we don't ruin things.”であるが，下線部の訳が「イナゴを追い払うために、、、」となっている。これは原文の軽視であろうか。“for”は「～を得るために」の意味であり，ウイントゥ族の人々はイナゴを食用として捕獲したものと思われる。この文の前段にある“When we dig roots, we make little holes.”という文中にある“roots”も食用としての

「根」つまり「根菜類」である。後段の“We shake down acorns and pinenuts.”も，どんぐりや松の実を食用とするために，木をゆすって落としたのである。訳者は，原文の軽視もさることながら，人類学関係書などで調べる努力が必要であったのではないか。調べれば，カリフォルニアの多くの部族が昆虫や根菜類を食用として利用したことに気付いた筈である。柴田耕太郎は，翻訳作業の中における事実調べの割合の高さと重要性を指摘している[2)]。ちなみに，「インディアンの声を聞け — No. 2」[3)]では，この部分が「イナゴをとるために草を燃やすときは、、、」となっている。

いま一つの誤訳も軽率さから引き起こされたものである。アメリカ人の間では余りにも有名なネズ・パース族のジョウゼフ族長が，１８９７年に当時のヘイズ大統領とアメリカ議会議員を前にして行なった演説の一部である。インディアン各部族の指導者が備えているべき資質の一つとして雄弁さが挙げられるが，この演説の結果，部族の一部の人々は故郷に帰ることを許されたほど説得力のある演説である。誤訳のあるパラグラフは「自由」を訴えたもので，次の通りである。

“Let me be a free man --- free to travel, free to stop, free to work, free to trade where I choose, free to choose my own teacher, free to follow the religion of my fathers, free to think and talk and act for myself --- and I will obey every law or submit to the penalty.”

下線部の訳文が「、、自由に立ち止まり、、」となっているが、「、、自由に滞在し、、」の誤りであり，これ以上の説明は不必要であろう。

スー族のシッティング・ブルも雄弁な指導者の一人に数えられているが，次の誤訳も彼の一文の中からである。白人による自分への非難に対して，逆に白人の態度を批判しながら堂々と自己を弁護しているものである。原文は，白人の数々の条約不履行や土地強奪を厳しく非難した後，“What white man has ever seen me drunk?”という反語に続いて訴えている“Who has ever come to me hungry and unfed?”である。訳文は，「俺の所に来て，腹を空かせたり，何も食べさせてもらえなかった者はいるか」であるが，正しくは，「俺の所に空腹でやって来て，何も食べさせてもらえなかった者がいるか」ということであろう。原文は次のように続く。“Who has ever seen me beat my wives and abuse my children? What law have I broken?....”

本項では，原文に対して安易で軽率とも思われる訳を取り上げた。訳者には慎重な態度が望まれる。

III

この項では，前項で取り扱ったものと同じ書物から，原文の内容を伝えるには明らかに不充分だと思われる訳を紹介したい。これらは単純な語学上のミスではなく，対象となっている文化に対する知識に関係するものであり，適切な訳を得るためには，訳者には少なくとも辞典類にこまめに当たったり，専門家に問い合わせる等の努力が必要と思われるものである。

最初に取り上げるのは，１７４４年，ペンシルヴァニアの六部族連合のインディアン達がメリーランドとヴァージニアの白人代表団との条約交渉の折に，白人側からのインディアン子弟教育の申し出に対して，丁重に，しかもきっぱりと辞退しているものである。六部族連合側は，白人側の申し出に感謝しながらも，きちんと理由を述べた上で断わっている。その理由は，以前に自分達の若者が白人の大学で教育を受けたにもかかわらず，自分達のもとに帰ってきた時には，“bad Runners”になっていた，というものである。ここで問題にしたいのは“bad Runners”であるが，その前後は次のようになっている。“...different Nations have different Conceptions of things and you will therefore not take amiss, if our Ideas of this kind of Education happen not to be the same as yours. We have some Experience of it. Several of our young People were formerly brought up at the Colleges of the Northern Provinces: they were instructed in all your Sciences; but, when they came back to us, they were bad Runners, ignorant of every means of living in the woods... neither fit for Hunters, Warriors, nor Counsellors, they were totally good for nothing.”

当該訳書では，「一人前に走ることもできず，森の中での暮らし方も知らず、、、狩人にも戦士にも，議員にも向かない、、、」となっている。単語の単純な誤りは別としても，

文法的には“bad Runners”の後にカンマがあり，“ignorant of ～”と続いているので，“bad Runners”を具体的に言い替えたのが“ignorant of ～”以下であると解釈するのが妥当ではないだろうか。“bad Runners”を単に「一人前に走ることもできない」として処理するのではなく，何か特殊な意味があるのではと疑ってみるべきではないか。Peter Nabokov は南北アメリカ大陸のいろいろな部族にとっての「走ること」の意味を調査・研究している[4]。彼によると，白人が来る以前はインディアンは単に連絡のためや，戦いや狩りのために走ったばかりでなく，神話を演じたり，自分達と神々との間を結ぶためにも走った。文法的にみても，Nabokov の研究から見ても，“bad Runners”は，「一人のインディアンとしても，指導者としても充分な資質がない人物である」という意味だと判断できる。ではどのような日本語訳が適切であるかは簡単なことではない。難解そうにみえても直訳が何となくすっきりする場合もありうるが，この文章の場合は直訳は適切ではない。「指導者としての資質が備わっていなかった」とするのはどうであろうか。

ついでながら，counsellors は「議員」と訳されているが，「相談役」ぐらいが適切であろう。

先にも紹介したネズ・パース族のジョウゼフ族長が神と大地の関係に触れながら，自分の故郷に対する権利を主張している文の中からも，訳文が不充分なものがみられた。“The earth and myself are of one mind.”に続くもので，“The measure of the land and the measure of our bodies are the same.”という文章である。訳文は，「同じように，大地の広さと私たちの体の大きさだってひとつなのだ」というものである。明らかに話者の真意を伝えていないし，読者にはその意味が理解できないであろう。あるいは，訳者自身にもその真意が理解できていなかったのかもしれない。先述のように，直訳が適切な場合も多いが，ここでは，「大地の尺度と私たちの尺度は同じである」としたらどうか。あるいは，読者の理解を助けるために，意訳により「大地も私たちもともに偉大なる精霊により創造されたのだ」とするのはどうか。「偉大なる精霊」をずばり「神」としてもよい。

最後に，ワシントン州の都市にその名を残しているシアトル族長の名演説から不充分な訳を取り上げたい。郷里から居留地への移住を余儀なくされた条約の締結時に述

べたものである。故郷への強い想いを語った中に，次のような個所がある。

"When the last Red Man shall have perished, and the memory of my tribe shall have become a myth among the white man, these shores will swarm with the invisible dead of my tribe , and when your children's children think themselves alone in the field , the store, the shop, or in the silence of the pathless woods, they will not be alone....At night when the streets of your cities and villages are silent and you think them deserted, they will throng with the returning hosts that once filled them and still love this beautiful land. The White Man will never be alone."

最後の文章，"The White Man will never be alone." が，「白人はけっして自分たちだけにはなれません」と訳されている。シアトル族長は若い頃すでに白人移住者の激増をみており，また早い時期にキリスト教徒となって平和を切望していたし，進んでこの条約に署名したのも平和を確実なものにするためであったことを考え併せると，彼は，「白人は一人ぼっちではありませんよ，寂しくないですよ」と，白人への思いやりを伝えたかったのではないであろうか。

本項では，話者の真意を伝えるには不充分と考えられる訳を取り上げた。しかし，読者のインディアンに関する知識の多寡などにより，果たして不充分な訳といえるかどうかは判断が難しい。筆者の独断である部分があるかもしれない。

結

これまで取り扱ってきた誤訳ないし不充分な訳は，筆者が授業でテキストとして使用したり，繰り返し読んだりした本にそれらの原文が載っていいたために知り得たものである。それは，T.C. McLuhan が編纂した *Touch the Earth* [5] であるが，インディアンと白人の最初の接触から今日に至るまで，さまざまな情勢のもとで，インディアンの指導者などが表明した言葉が収められている。

初めに話者が語った事を，当時インディアン各部族の中で過ごしたことのある罠猟

師や探検者などが，英語に関しても，その部族言語に関しても未成熟な知識しか持ち合わせていないままで英語に訳した可能性もある。それを，後世の歴史家などが再び英訳したことも考えられる。つまり，複数の英語訳が存在することもありうる。このような状況の中で，日本語訳の適不適を議論することは，あまり意味がないともいえる。ここでは，取り扱っている文章の前後や，英文法やインディアンに関する知識などに基づいて判断が可能な誤訳あるいは不充分な訳と思われるものを取り上げた。

１冊の翻訳書だけでこれだけの誤訳がみつかるのであるから，多くの英語によるインディアン関係書の日本語訳が出版されている現状を考えると，他にも誤訳ないし不充分な訳が存在するのではないか。

ここで取り扱った誤訳ないし不充分な訳について，それぞれ訳者宛に資料を添えて，意見を求める手紙を送ったが，ついに返事は得られなかった。

筆者がアメリカ・インディアンの教育について研究を始めた頃は，一般的なインディアンに関する日本語の書籍類は翻訳書も含めて皆無といってよい状態であった。アメリカの書籍類を探して注文し，それが手元に届くまでには多くの時間を要した。その上，内容的に筆者の研究に使用できないものも少なくなかった。このことを考えると，わが国で翻訳書が中心であるが，多くのインディアン関係書が出版されている現状も，それに伴ってインディアンに関心を持つ人が増えている事実も喜ぶべきであろう。しかし，同時に，インディアン関係の書物を出版する側の責任は大きい。語学者として，また「異文化伝達者」として，翻訳に携わる人々の責任も当然ながら大きい。

注

1） 藤岡啓介『翻訳は文化である』（丸善ライブラリー）2000，40ページ

2） 柴田耕太郎『英文翻訳テクニック』（ちくま新書）1997，59ページ

3） 『モノ・マガジン 第266号―インディアンの声を聞け No. 2―』（ワールドフォトプレス），2000年12月，17ページ

4） Peter Nabokov, *Indian Running,* Capra Press, 1981

5） T.C. McLuhan, ed., *Touch the Earth*, Simon and Schuster, 1971